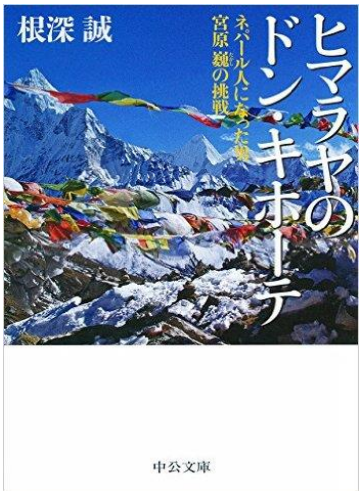
根深　誠著

「ヒマラヤのドン・キホーテ」・ネパール人になった日本人



本書は1970年代初め、3年がかりでヒマラヤ山中にホテルと飛行場を建設し、ネパール観光事業のパイオニアと称される宮原巍（たかし）の評伝である。エベレストビューホテルは世界一高い標高（3880m）にあるホテルとしてギネスブックに登録された事もあり、文字通りエベレストを眺めるには最高の地に建てられており、私は2度立ち寄った事がある。晴れた日にホテルのテラスの長椅子に寝ころんでエベレストやローツェ、アマダムラム等の高峰を眺めながら飲むコーヒーはまさに至福の時、これ以上の贅沢はないと思わせるものがあり、よくぞこの地にホテル建設されたもの、それも日本人とはと感心したものだ。

宮原は1934（昭9）年長野県の生まれ。地元上田高校を出て日本大学理工学部に進み在学中は山岳部に所属し、大学卒業後は理研ビニール、千代田化工建設等に勤めたが、その間に休暇を遣り繰り、あるいは退職したりしながら冒険、探検へとの夢断ちがたく心掻き立てられて、遂にはネパールに永住してしまうのである。主な履歴は以下の通りだ。

1959（昭34）、25歳、第4次南極観測隊隊員に選ばれて憧れの南極で基地設営に従事
1962（昭37）、28歳、日本大学ヒマラヤ登山隊に参加。ムクト・ヒマールの未踏峰ホングデ（6556m）初登頂
1965（昭40）、31歳、日大グリーンランド探険隊に参加、日本人初の北極圏探険隊として23日間自力で橇を引いて氷原を歩き未踏峰フォーレル山に挑む。
1966（昭41）、32歳、単身インドより自転車でネパール入国、ネパール中小企業局勤務
1969（昭44）、35歳、ヒマラヤ観光開発株式会社設立
1970（昭45）、36歳、エベレスト・ビューホテル建設着工
1971（昭46）、37歳、ホテル営業開始。シャンボチェ空港建設着手（1973年完成）
2005（平17）、71歳、ネパール国籍取得
2008（平20）、74歳、ネパール国政選挙に立候補、落選。党名は「ネパール国土開発党」

二十代で登山家としてヒマラヤを訪れ、三十代で起業家としてホテル・飛行場を建設しネパールの観光振興に貢献した宮原は、七十代でネパール人となって政治家として立ち上がり国政選挙に打って出るまでになる。何が宮原を掻き立ててそこまでやるのか。著者根深誠の関心はそこに集中し選挙運動に密着取材しその深層に迫っていく。宮原よりも一回り以上年下の根深誠は大学は異なるものの、同じ山岳部出身者として大先輩の宮原とは旧知の間柄、登山家として度々ネパールを訪れている内に彼も又ネパールの魅力に魅せられて、ボランテイアでヒマラヤ奥地トルボ地方のツァンカ村に鉄橋を架けるまでになる。その経緯は「ネパールに架ける橋」（みすず書房）に詳しく、以後はヒマラヤに関する10冊近い著作を発表し、登山家としてよりもノンフィクションライターとして活躍中だ。

根深によれば宮原の拠って立つ精神的基盤は日大山岳部時代に叩き込まれた探検精神とそれを実践する為の敢闘精神にあると云う。若い頃に探検精神が乏しく内向きな日本社会に息苦しさを感じ、働いて貯めた500ドルを懐に日本を脱出しネパールを活動拠点にした時から事業でも政治でもまずは行動、即実践をモットーとして理想や夢を先行させ情熱の滾るままに猛進する一途さがあり、そこにドン・キホーテという異名をとる所以が潜んでいると説明する。宮原はその後カトマンズ市内にもホテルを建て、

さらにポカラにも３つ目のホテルを開業、外国で３つのホテルを経営する社長といえば大金持ちと思われるだろうが、その現実はどん底状態で、部外者が連想する社長のイメージからは程遠い経済状態にあるらしい。起業家であってもあまり商売は上手くないということもドン・キホーテと云われる所以なのかもしれない。

ネパールに永住し国籍まで取得した宮原は、国の政治腐敗を憂い、行動する事、つまり実践が大切であって、どんな高邁な意見でも単に述べるだけでは何の役にも立たないのだと国政選挙に打って出るまでになったのだが、この国の人達の為に何とか役立ちたいという思いは空回りし、残念ながらあまり理解されてないようにみえる。宮原の他にもネパールに住み着き 200 以上の学校を建てたＯＫバジさんや、小さな村に音楽ホールを建設した音楽家の横井久美子氏、絵本文庫を作り子ども達を支援している桜井ひろ子氏等ネパール支援に私財を投げ出し活動している日本人は多いが、宮原は基本的に援助ではこの国は向上しない、学校を建てるという美談のような話は偽善であり、むしろ弊害を生んでおり、政治の世界から変えていくしかないのだと意欲を燃やしているのだ。

現存する者の評伝を著す時、都合の悪い事には目を瞑り、良い事や誉め言葉を羅列したサクセスストーリーになりがちだが、本書では宮原の友人である著者根深はその点に留意し、客観的立場に立って本人にあまり入れ込みすぎず、割と冷静に筆を進めていると思う。

只、正直な話、宮原の若かりし頃の生き方に興味はつきないものの、晩年の政治家になってからについては読み進めながら虚しさを感じてしまったのは何故なのだろう。無謀なる挑戦、まさにドン・キホーテの面目躍如ではあるのだが。

中公文庫　2015 年 10 月刊　886 円　（初版は 2010 年 10 月　中央公論社　1800 円）

（ＡＫＡ）

「図書紹介」目次画面に戻るには、画面左上の「戻るボタン」で戻って下さい